

資料6

新潟県中越沖地震 災害時要援護者被災状況、支援状況調査結果

1. 目的

被災地の障害当事者、行政及び福祉関係者等へ被災状況並びに避難生活の聞き取り調査を行い災害時要援護者の避難生活・避難支援のあり方の検証資料とする。

2. 調査方法

ヒアリングによる訪問調査による。

3. 調査員：菅沼良平（わだち） 水谷真（わだち） 田中勝美（神栄株式会社）

4. 調査日程および訪問先

平成19年11月28日（水）～11月29日（木）

11月27日（火）

16:30	名古屋 発（レンタカー）
22:30	長岡 着

11月28日（水）

09:30～11:30	長岡市 特別養護老人ホーム 槇山けやき苑	1
13:00～14:30	柏崎市 トライネット	2
14:30～16:00	柏崎市 たまり場喫茶めぐ	3
18:00～19:30	刈羽村 障害当事者 Nさん	4

11月29日（木）

9:00～9:45	柏崎市役所防災・原子力課、福祉課	5
10:00～10:45	柏崎市 元気館デイサービスセンター（障害者デイサービス）	6
11:00～11:45	柏崎市 松風の里（知的障害者入所更生施設）	7
13:00～14:00	柏崎市 茨内地域生活支援センター（障害者地域生活支援センター）	8
14:30～15:15	柏崎市社会福祉協議会（ボランティアセンター）	9
15:30～16:00	柏崎市 仮設住宅見学	10
16:00	柏崎 発	
22:00	名古屋着	

ご提供資料

「事業所向けヒアリング調査票」(回答してもらったもの)
柏崎市福祉避難所利用者数一覧
「柏崎小学校福祉避難所タイムスケジュール」
福祉避難所についてのQ & A資料
「平成19年8月3日現在新潟県の被災支援状況について」(全国老施協)
「福祉避難所の要援護高齢者が自宅等に戻るための相談支援について」(柏崎市保健福祉部)
「三古老人福祉会」法人施設概要図
「10・23 中越大震災 法人内各施設にて被災者支援行う」(法人ニュースレター)
「7・13 水害 法人内各施設にて被災者支援行う」(法人ニュースレター)
「長寿第62号 2007.9」(法人+10 施設機関紙)
「中越大震災記録集 私たちの記録、そしてこれから」(新潟県老施協)

柏崎小福祉避難所について、事務局長が入っていたのは25日間/44日開設。

前回の経験

3年前の中越沖地震の際にも支援を行った。幸い施設に被害はなく、18:00頃発災後、18:30には緊急受入を始めて、障害者や一般の人も含め対応。学校が土曜日で開いておらず、地域の人たちの認識あって、19:30には60名を受け入れた実績がある。

法人の特徴として、規模が飛び抜けて大きく、特養5つ、老健2つ、ケアハウス等も合わせると10ある。被災地から比較的近く、職員が分担して負担を担える体制がある。入浴の設備と移送や介助の力があって提供できた。さらに仮設住宅での山古志の人たちが慣れないキッチンではうまくご飯が作れないので、慣れるまで食事提供を実践した。

これまでの支援実践を踏まえて、今回法人としての支援がスタートしている。

県外の介護スタッフの力を借りてコーディネートした県老施協の実績もあって、県から県老施協に福祉避難所のコーディネートの依頼があった。実際に担えるのは当法人との県老施協の判断で、コーディネート機能を当法人に依頼された。法人理事長が県老施協の会長でもあった。

長岡市とは16年4月に協定を結んでいて、支援をすることになっていたが、柏崎市とは事前協定なし。そういうことに関係なく、前回も小地谷市、川口町、山古志村は協定なく支援した経緯もある。老施協の会員施設はお互いさまという感覚で動いていた。

今回の経緯

福祉避難所は柏崎市、刈羽村で最大8箇所開設された。1つを除いてすべて関わった。柏崎高校は県の老人保健施設協会が担った。

「柏崎小学校」福祉避難所においては、立ち上げ、コーディネート、介護スタッフの全て老施協が担った。特養「いこいの里」と「くじらなみ」2つの福祉避難所は、会員施設であっ

たため、立ち上げはその施設だが、介護スタッフの足りない分は老施協から派遣した。

「元気館」は老施協が立ち上げた。「長浜デイサービス」は運営母体の株式会社ツクイが立ち上げ、老施協として関わっている。「刈羽村」については、刈羽村社協が立ち上げたがこれも老施協の会員なので、派遣スタッフは老施協が全面的に関わった。

私たちは「長岡三古老人福祉会」と「県老施協」の2つの立場があったが、活動中は常に「県老施協」の顔で動いていた。実際には県内スタッフの3分の2は「長岡三古」のスタッフであった。

法人内の意志決定

細部にわたるマニュアルは存在しない。災害があったら30分以内に施設に連絡をとったり駆けつけるなど、職員自身の安否を伝えるようにしている。同時に、各施設から本部に対して15分以内に、第1次確認として、施設、職員、利用者の安否情報を伝えるようにしている。幸い大きな被害はなかった。

7/17、週1回の運営会議にて緊急集合。今後の対応について法人としての方向を決めた。その時は、福祉避難所の担当をすることは思っていなかったため、緊急受入の担当窓口責任者および、入浴、移動に関する支援活動の責任者を決め、この2本柱と、在宅の利用者に対するフォローを確認して会議を終えた。

7/18も会議で、緊急受入の体制や、入浴の無料開放の段取り、準備等を話し合っていた途中で、県老施協事務局から刈羽村福祉避難所の開設にあたってのスタッフ派遣を法人でまかなくて欲しいとの依頼あり。規模等を確認して可能であるとの判断から承諾した。

その1時間後、今度は「柏崎小学校」福祉避難所の開設にあたって、手伝って欲しいとの依頼。刈羽村の方はもともとデイサービスセンターであったところを福祉避難所にするので、設備面も最低限のスタッフも整っていたので難しくないと思われた。「柏崎小学校」は設備が不明なところなどどのように学校を活用するかの情報がなく、スタッフはいない、避難所の規模も柏崎市で最も大きく、2つもまかなうのは無理だとの判断で、一度は「柏崎小学校」を断った。

最終的には県内の老施協会員が派遣するスタッフの数は保障するので、コーディネートを含めて調整役を当法人が中心になってまかなくて欲しいとの県老施協からの依頼があった。県老施協としての立場もあったので、そうであれば受けざるを得ないと支援を決定した。15:00か、16:00のことだった。

福祉避難所の開設

7/19の9:00には刈羽村、10:00には柏崎小学校に入って、開設の準備に取りかかった。

今までの避難所に比べて、確かに「システムの」とか「連携が図られていた」といわれるのは、私たちがすでに経験していたということ、それと2つの福祉避難所をコーディネートしなければならないということが背景にある。刈羽の方は行政の人泊まり込んでくれて、もともと社協の建物で環境面も含めて万全の体制であったが、私たちは行くまでそれを知らなかった。2つをコーディネートしなければならない、電話やファックスが使えるかどうか分からなかったことから、パソコンをモバイルで通信できるようにした方がよいと判断。

前回の地震の経験では携帯が有効だった。携帯通信を活用するためNTT Docomoと掛けあってPCカードの提供を受け、PC等の機材を持ち込んだ。

11:00 頃、掃除や最低限のセッティングをした時に、県の福祉部長の命令で福祉避難所の立ち上げを一任されてきた保健師がいて、現地でたまたま鉢合わせした。対象者は保健師が探してきて、開設は老施協が担当する、いくつか開設しつつある福祉避難所の拠点を柏崎小学校にしようと、即決。そこから他の避難所との連携が始まった。

人から見ると少し不安だったり、大丈夫だったり、その境界の人たちが福祉避難所の対象。今回の福祉避難所は、県が必要だから作れという指示からで、柏崎市としては何が何だか分からないままだったと思う。市に他の福祉避難所について問い合わせても、「場所や設備はこれからです」というだけ、ベッドも「手配しました」というだけで、7/19 時点ではなかった。柏崎小学校の「生きがいデイサービス」という場所を借りられたが、最初はその一部だけで、「ここで 30 名対象とせよというのか」という感じだった。ベッドのあてもなかったので、日頃のつきあいの中で、関係業者に要請したところ業者から提供の申し出あり。

現場の判断と裁量権

経験と勘でできるだけことはしようと手探りで始めた。現場に権限があったと言われるが、行政からの指示や支援はなかったので、そうせざるを得なかった。

こちらから言う前に長岡の福祉用具業者からは前回のことがあったので、「動くことがあったら何でも言ってください」と申し出があった。最初は柏崎エリアの業者と掛けあったが、倉庫がつぶれるなど被害が大きくて、動きがとれない状態だった。市の担当が掛けあってもうまくいかなかったのは、そういう事情があったと思う。私たちは長岡エリアの業者に依頼して入れた。

私たちが掛けあった業者については「お金のことは言わないから」との申し出だった。柏崎市が頼んだ業者については、たぶん請求書が市に回っているだろう。

ポータブルトイレ、シャワートイレ、マット、おむつ等も手配。

ベッドは確保できなかったときに、マットレスを準備してもらった。

プライバシー確保

福祉避難所ではベッドが野戦病院のように並んでいて、着替え等が見えてしまうため、ベッドとベッドの間に仕切りが欲しくて間仕切りを要請した。一般避難所から盗んできたりもした。県がどうか用意してくれたのは、900mm 程度で低かった。私たちは背の高いものが欲しいとずっと訴えていた。福祉避難所では申し訳ないが男女同室だったので必要だった。老健協会とも、間仕切りが手に入った、入らないと情報交換していただくらい。

福祉避難所の利用者数 資料 参照

介護スタッフの派遣要請

スタッフについては、コーディネータについては、生活相談員、ソーシャルワーカーレベル。コーディネートだけでなく、スタッフに指示を出さなくてはならないので、そのレベルの職員を出すということを法人で決めた。介護スタッフに関しても、誰でもいいというわけではなく、「その場で自分で判断できるレベルの職員を派遣して欲しい」と県内に要請。集め方については、県老施協が地震の翌日 7/17 に被災状況確認をして、その後派遣要請依頼を出し、「派遣可能な人数と日数を出して欲しい」とアンケートが老施協事務局から出た。

私たちが福祉避難所を立ち上げる時には、施設別の派遣可能人数が届いた。私がシフト表を作って派遣してくれる施設の方に、ファックスを送った。

7/19 から 1 週間分を作った。

全国からの応援

長続きしそうだったので、全国老施協、関東ブロック老施協と相談しながら、全国から協力を願おうということになった。7/26 頃、全国担当者が現地入り、支援体制の打ち合わせをした。シフト表を作った。全国からの応援は多いときで、140 名。

全国からは県別、施設別、職員名の一覧（何日から何日まで入る）が届いて、それも私の方で、「刈羽村」と「柏崎小学校」、「元気館」等の福祉避難所分を振り分け作業をした。

振り分けはたいしたことはないが、県外の方は新幹線で長岡駅にまず来るので、どう動くか分からない。そこで、法人施設「縄文の杜関原」（健康増進的施設）にて寝泊まりと食事の拠点を作った。長岡駅に集合時間を決めて、「縄文の杜関原」に一泊してもらい、その間にオリエンテーションを実施。翌朝、それぞれの福祉避難所へ私たちの送迎で振り分けた。振り分け先で寝泊まりしてもらおうが、どうしても寝られないという人は、私たちの送迎で「縄文の杜関原」に戻ってきてお風呂に入って駅まで送り帰ってもらう。

拠点を作らないと、例えば柏崎駅集合にした場合、時間になっても集まらないなど問題あり。長岡駅で迷うより柏崎駅で迷われる方が困るとの判断。拠点を作って、初日と最終日くらいはこちらで食事をちゃんと出すという対応をとった。

派遣中は避難所の方で食事はある程度準備できるし、いざとなれば車で買い出しもできた。法人で負担。「縄文の杜関原」は地域還元の一環で健康増進的な施設を作ってきた。

全国老施協からは「平成 19 年 8 月 3 日現在新潟県の被災支援状況について」という文書に関係団体に出して介護職員の派遣を呼びかけてくれた。提供資料。それ以外にも、他府県老施協からは資金支援もしてもらった。

寝る場所、移動手段、情報などの拠点を初期段階で確保

他の法人では一法人で支えるのは難しいだろうから、法人どうしが協力しないとできないだろう。「青年の家」「 の家」というのは行政管轄なので、思いつく施設との事前の協定がないと難しいだろう。行政には即日、即時の判断をしてもらえないで困ったので、行政とは事前の協定がないと難しいだろう。社会福法人は柔軟に動けるが。

コーディネータが一度勤務すると 29 時間貼り付けになる。「縄文の杜関原」に朝 6:30 に集合して、派遣スタッフと避難所に一緒にいき、翌朝 9:00 頃まで過ごして、「縄文の杜関原」に戻って風呂を浴びてもらい、長岡駅まで送るというサイクル。

福祉避難所の利用者像

要介護度 4、5 の人もいた。要支援に引っかからない人もいた。障害者では精神疾患の人や視覚障害の人。どこで線引きと言うことはしなかった。相談のあった際に受け止めて、福祉避難所が適当なのか判断をした。福祉避難所は一次避難所でしかなく、長期化する場合は最も適当な場所を検討。自宅の状況確認をしなければならぬとか、家族と離れられない事情

がある場合は福祉避難所。それ以外はできるだけ適当な施設を紹介した中で、残った人ということなので、必ずしも状態では選別できない。

利用につながるケースとしては、保健師が案内してきてくれたり、併設された一般避難所を私たちがまわったりしながら、「どうでしょう」と案内した。家族と離れられない人の場合は、家族で福祉避難所で過ごしてもらった。

医療的ケアが必要な場合。食事制限のある場合は主治医と連絡をとったり、保健師に必要な食材を集めてもらったりして対応した。緊急的な治療が必要な場合や、出産間もない妊婦や赤ちゃんについては病院を紹介した。

高熱を出した人で病院をみてもらっても病院がいっぱい返される。そういう人は福祉避難所で受け止めた。

福祉避難所のコーディネータと同時に、老施協という立場もあるので全ての相談を受け止めて、次のところが決まるまでは避難所で。

移動についてはリフトバスで現地入りをしていたので、二次避難の必要な人は、その人を引き連れて移送した。

福祉の相談窓口

社会福祉士会で相談所を設けて相談が集中した。と同時に、「福祉避難所に専門家がいるらしい」と市民の中に浸透したお陰で、何でも福祉避難所に相談に来られた。市の窓口で相談できなかつたら、「柏崎小学校に行くと福祉の相談員がいる」と振られて、それが最も困った。コーディネータに一所懸命の時に、「今一時的に親戚の長野県のところに行っているが戻ってきたいがどうしたらよいか」などという相談がいっぱいあった。

10人に1人相談援助員を置くというマニュアルはあるが、老人ケアは対応できても、それ以外は疎い部分もある。相談支援については県で何とかしてくれと要望。県の出先機関に総合相談本部を置いてあったので、そこに振ってもらい、相談件数は少しだけ減った。行政も機能しなければ、最後はサービスをもっているところに集中してしまう。私たちは仮設を持っていて、難しいときは施設を持っている、老施協で対応できなくても横のつながりで障害施設を持っている...という安心感。

居宅サービスの利用

仮設住宅からデイサービスを利用する人はたくさんいる。福祉避難所からデイサービスやヘルパーを使っていた人もいた。在宅でなくても在宅とみなす通知を県と市が出したはず。

障害者の受け入れと相談窓口

区別するつもりはないが私たちは老人が主だった。年配でない人たちはどこに行っていたのだろう。何人か来て、見て、使ってもらったが、それ以外の人たちはどうしたのだろう。障害者の自立支援センターはあるけれど、老人分野ほど包括的に受け止める意識はまだないようなので、私たちがニーズを把握してそちらに振るということが多かった。

柏崎小学校には児童が何人かいて、多動の人もいて受入はした。途中から事務所スペースがもらえたのでそこで受け入れた。そこまで専門性はないので、たまたま看護協会の協力があった。その方は、避難所を5～6箇所まわってどうしようもなく、市の児童担当とは

連絡が見つからないし、「どうしたらいいのか」と避難所の受付窓口の人とやり合っているところ
たまたま私たちが通りがかって、そういう状況を発見。「お困りであれば今晚どうぞ休んでく
ださい」と申し出た。

避難所の受付窓口の人も、福祉避難所に案内していいものか判断しかねていた。私たちの啓
発も足りなかったのと、事前の協定やマニュアルが必要かなと思う。児童がたくさん来たの
も、行政窓口の職員に私の知人がいて「子どもが夜寝なくて困ったら連れてきていいよ」と
伝えたのがきっかけで来るようになった。たまたま知り合いというのがなければ伝わらな
かった。

保健所の役割

保健医療分野も福祉分野も市に事務移管されていて、市がパニックになったとき、保健所に
何とかして欲しかった。福祉避難所では対応しきれないので、最後は保健所に相談本部を置
いてもらった。客観的に見える立場が保健所スタッフ。

県内の保健師は今回交代で来た。保健所は保健師の派遣体制を組んだ。動き方として助か
った部分と困った部分とあった。老施協も社会福祉士会も、中心になるメンバーは最後まで替
わらなかったが、保健師は4日間で替わるので、この前はよかったのに、次は違う判断にな
ったりした。

避難所の相談窓口で、私たちは「困っている部分だけどうにかして欲しい」と訴えたが、保
健師さんは「こういう相談は福祉避難所、こういう相談は」と分けようとしてもめたこ
とがあった。

(1) 基本情報

社会福祉法人長岡三古老人福祉会 特別養護老人ホーム 槇山けやき苑

事業概要... (ご提供資料 参照)

法人職員 960 名

(2) 施設環境について

施設の被災状況

- ・ 特段の被害なし

災害時の備え

- ・ 食料品、飲料水...備蓄庫に 800 食分 (3 日分程度) 備蓄。庭に動植物あり。畑あり。
- ・ 生活用水...冷却棟や大きな池がある。
- ・ 生活必需品...懐中電灯、ろうそく、カセットコンロとカセット、軍手、携帯用カイロ、反射ストーブなど
- ・ 衛生用品...おむつ (2 週間分)
- ・ 医薬品...多少あり
- ・ エネルギー源...灯油タンク (1500 リットル) 等

(3) 初動体制について

職員の参集計画と役割分担、入所者等利用者の安否確認方法等について

【施設】

- ・ 大きな地震と認知できた職員は、地震後 30 分以内に施設に安否確認の連絡完了。
- ・ 緊急入所受入の可能性等を予測し、管理者、受入窓口担当者、施設管理職員等参集。
- ・ 上記についてきちんとした計画は立っていない。先の中越地震の教訓と施設研修等で伝達している。
- ・ 利用者の安否確認については、当日利用者の状況及び、各設備、備品を確認し、事務所(管理棟)へ各フロアから報告。その上で家族などからの問い合わせに備える。

【法人】

- ・ 地震後 15 分以内に、第 1 報として、法人内各施設から本部へ、利用者、職員、施設の被害状況等の報告が完了。
- ・ 7/17 法人事務局員会議開催。状況把握。対応について検討。法人の支援方針の確認。入浴設備の開放。緊急受入などの各責任者確定。
- ・ 7/18
 - 10:00 前日確定した責任者レベルの会議開催。7/17 の会議に対する進捗状況確認等。
 - 12:30 会議中に新潟県老人福祉施設協議会事務局から、刈羽村に設置する福祉避難所への支援要請あり。当法人にて介護人等人的支援を一括請け負うこととした。その対応について検討開始。
 - 13:10 会議中に新潟県老人福祉施設協議会事務局から、柏崎小学校福祉避難所へのコーディネートを含む支援要請あり。刈羽村の支援要請を推敲したいので断った。
 - 13:30 会議中に新潟県老人福祉施設協議会事務局から、柏崎小学校福祉避難所への支援要請再度あり。人的支援について県老人福祉施設協議会の会員施設の協力が得ら

れることを前提に支援受諾。当法人にて介護人等人的的支援を一括請け負うこととした。その対応の検討開始。

【新潟県老人福祉施設協議会事務局】

- ・ 7/17 会員施設被災状況アンケート送信。

新潟県その他団体からの派遣要請の有無、状況

- ・ 新潟県を介して、刈羽村及び柏崎市からの福祉避難所設置に伴う支援要請あり。7/17～7/18にかけて。

(4) 支援・応援協力体制について

支援体制（緊急入所者の受入れ・移送、関係機関との事前協定）

- ・ 緊急入所者の受入、移送…施設及び法人で窓口調整役を決め、負担が偏らないように調整。また、緊急入所者に対して、家族の面会をしやすい施設や、同じ地区の方が同じ施設を利用できるように調整。調整先は法人内に限らず。
- ・ 関係機関との事前協定…長岡市との事前協定はあったが他とはなかった。

避難拠点（要援護者の避難場所）としての役割

- ・ 今回はなかった。平成16年の東日本大震災の際は、ケアハウスなどで虚弱者の受入を実施した。

広域的な応援体制（被災地外からのボランティア等の受入れ）等

【新潟県老人福祉施設協議会として】

- ・ 県内の会員施設職員を募り、特別養護老人ホームや福祉避難所へ派遣調整。
- ・ 県外の介護職員を全国新潟県老人福祉施設協議会を通して受け入れ。特別養護老人ホームや福祉避難所へ派遣調整。

(5) 医療・福祉サービスの提供状況について

事業所が、要援護者へ提供した医療・福祉サービスの内容について

- ・ 緊急入所者受入。
- ・ 入浴設備無料開放。
- ・ 県からの要請にて、柏崎市への送迎付きで「縄文の杜関原」の入浴設備提供。
- ・ 刈羽村内の小規模多機能型居宅事業所「もものき」に対して、ケアハウス「福戸」の入浴設備開放。
- ・ 刈羽村内の福祉避難所利用者に対して、送迎付きで「縄文の杜関原」の入浴設備提供及び介護実施。食事の提供。

被災者の受け入れ状況

資金面

- ・ 福祉避難所の経費は介護保険制度上及び各市町村が負担。
- ・ 福祉避難所の備品などの経費は自治体が負担。

- ・ 人的支援は派遣元の各施設が負担。
- ・ 県外は検車の食費や県内拠点（長岡市「縄文の杜関原」）から現地への移送実費については、各種団体からの義援金で対応。

（6）今後の地震防災対策について

今後の対応について

- ・ 県外スタッフの受入の際のマニュアル作成が必要。
県によっては震災支援に対する受け止め方が異なる。
配置調整及び支援体制の安定を図るために、派遣者一人ひとりの受入期間の設定の明確化。

行政等に望まれる対策等について

- ・ 総合相談窓口の迅速な設置...福祉避難所に社会福祉士を中心としたコーディネータを配置し活動していたところ、市役所や別の窓口に行った市民が福祉避難所に相談に来られ、当初の5日間程度はその対応に追われた。
- ・ 福祉避難所など各サービスの広報、啓発。
- ・ 福祉避難所設置の際の立地条件、場所、設置の時期について要検討。

関係各所各位(新潟県高齢福祉保健課介護保健事業係 様、柏崎市介護高齢課 係長様
各福祉避難所担当者、元気館2F市・ 保健師様・ 保健師様)

最後の報告になります。誠にお世話になりました。
本日定時報告時(15:00と19:00)までの各福祉避難所の利用者数となります。
福祉避難所をご利用された方々をはじめとする皆様の生活の安定が訪れることを祈念致します。

発信者: 柏崎小学校福祉避難所本部
担当: 、富田、 、 、 、
TEL: 0257-22-

柏崎市福祉避難所利用者数一覧

	7月19日		7月20日		7月21日		7月22日		7月23日		7月24日		7月25日		7月26日		7月27日	
	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00
柏崎小(定員30)	2	5	12	11	11	12	14	14	14	20	22	24	24	23	23	24	24	25
特養いこいの里(定員10)					4	4	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
長浜DSふれあい(定員10)	-	-			3	4	9	7	9	8	8	8	8	8	9	10	10	10
元気館(定員10)	-	-			11	9	12	12	10	11	12	13	13	13	13	13	11	11
柏崎高校(定員20)	-	-	-	-	0	0	1	1	1	1	3	1	2	2	2	2	2	4
計	2	5	12	11	29	29	40	39	39	45	50	51	52	51	52	54	52	55

	7月28日		7月29日		7月30日		7月31日		8月1日		8月2日		8月3日		8月4日		8月5日	
	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00
柏崎小(定員30)	27	27	27	27	27	26	26	27	25	25	26	26	27	28	28	28	27	27
特養いこいの里(定員10)	5	5	0	0	0	0	0 ^{0(終了)}	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
長浜DSふれあい(定員10)	10	10	9	9	9	8	2 ^{0(終了)}	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
元気館(定員10)	7	9	9	9	9	8	7	8	8	9	8	8	7	7 ^{0(終了)}	-	-	-	
柏崎高校(定員20)	5	5	7	7	7	7	9	12	12	12	12	12	12	12	12	13	13	
特養くじらなみ(定員10)	-	-	4	4	4	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	
計	54	56	56	56	56	53	49	52	50	51	51	51	51	52	45	46	45	

	8月6日		8月7日		8月8日		8月9日		8月10日		8月11日		8月12日		8月13日		8月14日	
	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00
柏崎小(定員30)	27	27	27	27	27	27	26	26	24	24	24	23	21	19	18	17	19	18
柏崎高校(定員20)	10	10	11	11	11	11	10	10	10	10	10	10	10	10	5	5	4	4
特養くじらなみ(定員10)	5	4	4	4	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
計	42	41	42	42	42	41	39	39	37	37	37	36	34	32	26	25	26	25

	8月15日		8月16日		8月17日		8月18日		8月19日		8月20日		8月21日		8月22日		8月23日	
	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00
柏崎小(定員30)	18	18	15	16	12	12	11	11	11	11	10	11	11	11	10	10	10	10
柏崎高校(定員20)	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
計	3	3	0 ^{0(終了)}	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
計	24	24	18	19	15	15	14	14	14	14	13	14	14	14	13	13	13	13

	8月24日		8月25日		8月26日		8月27日		8月28日		8月29日		8月30日		8月31日	
	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00	15:00	19:00
柏崎小(定員30)	10	10	10	10	9	9	9	9	9	9	7	7	4	4	-	-
柏崎高校(定員20)	5	5	6	6	6	5	5	5	5	5	5	5	5	5		
計	15	15	16	16	15	14	14	14	14	14	12	12	9	9	0	0

柏崎小学校: 9:30 様退所 特別養護老人ホームいこいの里ショートステイ
12:50 様退所 自宅
18:50 様退所 アパート(明日大雨になる前に帰りたいと申し出る。)

(老施協) 柏崎小学校、刈羽村 福祉避難所人的支援者数
県外 685 人
県内 399 人 (長岡三個老人福祉会312人)
計 1084 人

7:30	朝食	手指消毒（ウェットティッシュあり） 弁当届く（利用者、スタッフ分）
8:00	日勤開始	汁系を炊き出しの所へもらいに行く 炊き出しのおじや、ご飯希望の方あり
8:30	申し送り	夜勤者と日勤者
	掃除	フロアは掃除機あり 音楽室はホウキとちりとりあり 廊下はモップあり、テーブル拭き
	ゴミ捨て	分別して、残飯も処分
	トイレ掃除	ウェットティッシュあり
9:30	身体清拭（希望者）部分でもOK	タオル、洗面器、お湯を準備 衝立にてプライバシー保護
	体操	
	お茶出し	お茶、コーヒー、水あり
11:45	昼食	手指消毒（ウェットティッシュあり） 弁当届く（利用者、スタッフ分） 汁系を炊き出しの所へもらいに行く 炊き出しのおじや、ご飯希望の方あり
13:00	入浴時間（希望者確認）	男性、女性は日によって時間異なるため 連日確認必要 入浴チェアー4台あり、持参
	お茶出し	お茶、コーヒー、水あり
16:00	トイレ掃除	中味は仮設トイレに捨てる 飲料水ですすぎ、消臭スプレー噴霧
16:30	申し送り	夜勤者と日勤者
16:45	夕食	手指消毒（ウェットティッシュあり） 弁当届く（利用者、スタッフ分） 汁系を炊き出しの所へもらいに行く 炊き出しのおじや、ご飯希望の方あり
18:00	終了	

- ・ 時間をみて散歩や体操等体を動かす場面を設けるようにして下さい。
- ・ 利用者の方は今後、在宅復帰される方がほとんどです。過剰介護にならないよう、できるところは行っていただけるよう自立支援を働きかけて下さい。
- ・ 介護申し送りノートあり、特記事項を記入して下さい。
- ・ 夜勤者仮眠時間はパートナー間で決めて下さい。

社会福祉法人 長岡三古老人福祉会

構成市町村 長岡市(旧長岡市・旧越路町・旧三島町・旧与板町・旧和島村・旧寺泊町・旧山古志村・旧中之島町)・出雲崎町・燕市(旧分水町)
 社会福祉法人長岡三古老人福祉会は、構成市町村より推薦された理事18名、監事3名、評議員37名によって構成されています。



高齢者生活支援型複合施設桐原の郷
 グループホームきりはら(8名)
 ケアハウス桐原の郷(10名)
 高齢者生活福祉センター桐原の郷(12名)
 長岡市寺泊下桐3700-1
 TEL 0256-97-5000



特別養護老人ホーム桐原の郷
 (長期60名・短期35名)
 デイサービスセンター桐原の郷(15名)
 居宅介護支援事業所桐原の郷
 長岡市寺泊下桐3700-1
 TEL 0256-97-5000



介護老人保健施設てらどまり(147名)
 ホームヘルプステーションてらどまり
 長岡市在宅介護支援センターてらどまり
 居宅介護支援事業所てらどまり
 長岡市寺泊下桐850-1
 TEL 0256-97-3200



高齢者総合福祉相談センター分水
 デイサービスセンター分水(15名)
 居宅介護支援事業所分水
 訪問看護ステーションあゆみ
 ホームヘルプステーション分水
 パワーステーション分水
 燕市地藏堂本町3-1-25
 TEL 0256-98-0700



長岡市デイサービスセンターわしほ(30名)
 長岡市地域包括支援センターわしほ・てらどまり
 居宅介護支援事業所わしほ
 長岡市小島谷3422-3
 TEL 0258-74-3762



介護老人保健施設グリーンヒル与板(146名)
 ホームヘルプステーショングリーンヒル与板
 長岡市在宅介護支援センターよいた
 居宅介護支援事業所グリーンヒル与板
 長岡市与板町慎原393-8
 TEL 0258-72-2500



特別養護老人ホーム中之島
 (長期80名・短期20名)
 デイサービスセンター中之島(20名)
 居宅介護支援事業所中之島
 ホームヘルプステーション中之島
 パワーステーション中之島
 長岡市中之島古新田2105-6
 TEL 0258-61-2828



特別養護老人ホーム横山けやき苑
 (長期80名・短期40名)
 新潟県認知症介護研修事業受託施設
 長岡市横山町1593-1
 TEL 0258-29-2500



特別養護老人ホームみしま園
 (長期110名・短期16名)
 長岡市宮沢580-3
 TEL 0258-42-3131



長岡市高齢者センターまきやま
 長岡市デイサービスセンターまきやま(25名)
 長岡市地域包括支援センターまきやま・みしま
 居宅介護支援事業所けやき
 長岡市横山町1592-1
 TEL 0258-29-7002



長岡市デイサービスセンターみしま(25名)
 居宅介護支援事業所みしま
 長岡市宮沢354-1
 TEL 0258-42-3600



グループホームけやき(14名)
 ホームヘルプステーションけやき
 長岡市横山町1593-1
 TEL 0258-29-2590



【高齢者総合施設縄文の杜関原】
 特別養護老人ホーム縄文の杜関原
 (長期50名・短期30名)
 デイサービスセンター縄文の杜関原
 (一般型30名・認知症型10名)
 居宅介護支援事業所縄文の杜関原
 ホームヘルプステーション縄文の杜関原
 パワーステーション縄文の杜関原
 長岡市関原町1-1072-1
 TEL 0258-21-5055



ケアハウス福戸(60名)
 デイサービスセンター大荒戸(35名)
 ホームヘルプステーション大荒戸
 長岡市大荒戸町972-3
 TEL 0258-25-8124



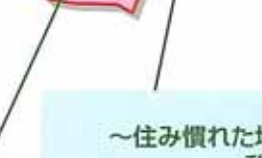
ケアハウスけやきの杜(50名)
 デイサービスセンターけやきの杜
 (一般型35名・認知症型10名)
 居宅介護支援事業所けやきの杜
 ホームヘルプステーションけやきの杜
 長岡市上野町1059-2
 TEL 0258-22-4400



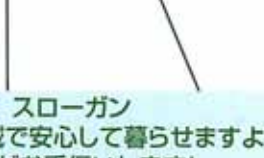
高齢者総合福祉相談センター幸町
 長岡市在宅介護支援センター幸町
 居宅介護支援事業所幸町
 ホームヘルプステーション幸町
 パワーステーション幸町
 長岡市幸町1-13-15
 TEL 0258-31-1155



(仮称)高齢者総合福祉相談センター福住
 在宅福祉の総合機能と研修機能を備えた施設として現在計画中。
 (H18年度開設予定)



社会福祉法人長岡三古老人福祉会 法人本部事務局
 〒940-2002 新潟県長岡市横山町1593番地1 TEL 0258-29-3555
 URL <http://www15.ocn.ne.jp/~nagasan/>



スローガン
 ~住み慣れた地域で安心して暮らせますように~
 私達がお手伝いします!



グループホームけやき(14名)
 ホームヘルプステーションけやき
 長岡市横山町1593-1
 TEL 0258-29-2590



【高齢者総合施設縄文の杜関原】
 特別養護老人ホーム縄文の杜関原
 (長期50名・短期30名)
 デイサービスセンター縄文の杜関原
 (一般型30名・認知症型10名)
 居宅介護支援事業所縄文の杜関原
 ホームヘルプステーション縄文の杜関原
 パワーステーション縄文の杜関原
 長岡市関原町1-1072-1
 TEL 0258-21-5055



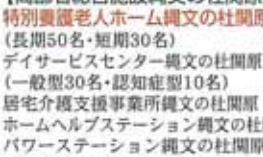
ケアハウス福戸(60名)
 デイサービスセンター大荒戸(35名)
 ホームヘルプステーション大荒戸
 長岡市大荒戸町972-3
 TEL 0258-25-8124



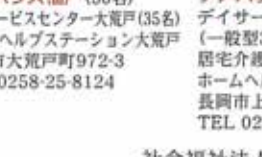
ケアハウスけやきの杜(50名)
 デイサービスセンターけやきの杜
 (一般型35名・認知症型10名)
 居宅介護支援事業所けやきの杜
 ホームヘルプステーションけやきの杜
 長岡市上野町1059-2
 TEL 0258-22-4400



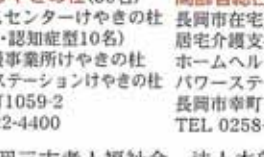
高齢者総合福祉相談センター幸町
 長岡市在宅介護支援センター幸町
 居宅介護支援事業所幸町
 ホームヘルプステーション幸町
 パワーステーション幸町
 長岡市幸町1-13-15
 TEL 0258-31-1155



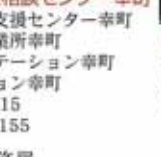
(仮称)高齢者総合福祉相談センター福住
 在宅福祉の総合機能と研修機能を備えた施設として現在計画中。
 (H18年度開設予定)



社会福祉法人長岡三古老人福祉会 法人本部事務局
 〒940-2002 新潟県長岡市横山町1593番地1 TEL 0258-29-3555
 URL <http://www15.ocn.ne.jp/~nagasan/>



スローガン
 ~住み慣れた地域で安心して暮らせますように~
 私達がお手伝いします!



グループホームけやき(14名)
 ホームヘルプステーションけやき
 長岡市横山町1593-1
 TEL 0258-29-2590

事業...スペースあると(生活介護、15名) ヘルパー派遣、短期入所、児童日中一時支援
建物...民家を改造。ナイトケアで泊まることも。

スタッフ...20名(正規は4名)。

被災状況...電気、停電1日。ガス1ヶ月。断水2週間、トイレは近所の井戸からもらい水、
くみ置きで対応。電話OKだった。携帯、1日目は不通。利用者でけがをした人は幸いな
かった。

災害時の備え...特になし。

常勤の事務局スタッフ4名が交代で対応。パートさんは全滅だった。それ以外に外部スタッ
フが5~10人/日、のべ200人参加。

翌日1日休んだ後、発災直後から支援を展開した。

外部スタッフを入れたのは、全国支援ネットの代表Tさん(愛知) 上越市の支援ネット代表
ら4名がきて励ましたこと。カツを入れられた。自分たちが被災していて支援できないと思
っていたところ、「こんな時にやらなくてどうする!？」。人手は出すから、場所を提供せよ
との申し出。当時トライネット代表は入院していた。

ニーズがあるかどうか確認の電話を利用者にしたところ、7/17(2日目)には5~6人みて
欲しいと訪ねてきて、利用が再開した。片付けの時、動ける子どもさんの面倒をみて欲しい
との要望。動けない子どもより、動ける子どもの家庭でのニーズが高かった。

序盤の頃は、地震のショックから子どもたちは親から離れたくない不安が強かったが、一度
利用始めると、すぐに慣れて、毎日利用が続いた。早く事業を開始しないとダメだと気づか
された。

人的要請については、さまざまなネットワークを通して、全国及び県内、市内の支援ネット
を通して発信。のべで200名、毎日来てもらった。

人的要請にあたっては「一日交代は困る」と注文をつけた。1日では子どものことを説明し
て理解してもらっただけで終わってしまうため、「最低3日間は続けて欲しい」。

また、来るときは自給自足で、「持ち物、食べものは自分で持ってきて欲しい」とも。

現場としては「素人お断り」と注文をつけた。支援ネットの関係は専門職で成り立っている
ので、専門家しか来ないが。

人材、場所、コーディネータがほしかった。

事務局長は本来コーディネータだが、電話は鳴りっぱなし、外部との対応に奔走して本来の
業務できず。外部からのボランティアさせて欲しいという申し出と、利用者とのコーディネ

ートの両方はやっつけられないのが現実だった。

上越市からKさんというNPOの代表がきてくれて、1週間寝泊まりで張りつきで、コーディネイト対応してくれたので助かった。トライネットは利用者の情報を出して、Kさんがニーズをマッチングさせて、そういう連携で対応した。身内のスタッフは外部との対応に追われた。

コーディネイトは外部の人で、でも全く知らない人ではなく、日常的にスクラムを組めていて、お互いの情報を共有できている人、かつすぐに駆けつけられくらいの距離の人が理想。近すぎると被災していてダメ。葬式でも身内はオロオロ、バタバタしてしまう、頼りになるのはすぐに頼める近所の人。災害の際に力になってくれるのもそういう感じの人。復帰後は、電話対応は事務局長から代表にバトンタッチした。

外部の応援でやっているときも、結果的に自立支援給付の対象事業となった。最初はどうか考えなかったが、支援者から「レスパイトだよ」と後押しされ、行政からも「ニーズがあったらとにかく受けてくれ」と言われた。「何とかやろう」と決心してやった。結果的に給付は受けられたので赤字にならずにすんだ。障害者自立支援法以降、市町村判断でできるようになったため、市が必要と認めたら事業として認められる。

北海道からは1週間どかんと泊まりに来てくれた。横浜の障害者支援センターも継続的に派遣してくれた。横浜は社協の一部だが、担当の人が施設と直接の関係があり、上に上げずにすぐに対応してくれた。要請の3日後には来てくれた。シフトも含めて対応してくれた。外部スタッフは概ね3日ごとの交代だった。助かったのは後半、引き継ぎ事項を自主的に申し送りしてくれたこと。

レスキューストックヤード、日本財団からの支援もあった。

日本財団は震災の夕方に駆けつけたが、トライネットの世話で、近くに拠点を構えて活動を展開した。日本財団からは助かったといわれた。ボランティア派遣について、日本財団経由での派遣もあった。

県内の知的障害者福祉協会からも派遣があった。立ち上がりは遅く終盤の方だった。

NPOは機動性があるのが特徴。後で反省することもあるが、必要と感じたら動くのがとにかく早い。組織が大きくなるとお役所的になって…。

トイレの次は風呂の問題だった。

日本財団から灯油給湯器の提供（レンタル）を受けた。これでお湯を沸かしてお風呂に使った。

自衛隊の風呂はあったが、家族風呂でないと入れない重心（重度心身障害者・児）の人がいた。母親が男児を入れられない。わざわざ市外の家族風呂を使いに行っていたが、トライネットで風呂が入れるようになり、母子で入ってもらった。自衛隊風呂について、問題ない人もいたので否定はしないが、使えない人がいた。ちょっとの工夫が必要と感じた。

物資

物資はあった。食べ物をもらっても腐らせてしまうほどあった。菓子パンとおむすび、菓子

パンとおむすび...、しかも常に1種類というのが続いた。カップラーメンは嬉しかったが、ものはすぐに買えるようになった。コンビニは早かった。

ライフライン

電気は早かった。7/16 その日のうちに復旧。水道は2, 3週間かかった。最初は汚い水が出た。飲める水になるまで時間がかかったが、それでもトイレが使えるようになり助かった。飲み水はペットボトルの水が余るほどあって困らなかった。ガスは1ヶ月以上かかった。トイレが使えるまでは、くみ置き水をいっぱい使ってしまう、すぐに足りなくなった。水は近くに井戸水があって、寝泊まりするボランティアが夜中にくみ置きしておいてくれた。電話はずっとつながっていた。携帯は1日かかったが、携帯メールは半日遅れぐらいで届いた。3年前も同じ。メールでなんとかしのげた。

利用者の様子

福祉避難所としては、柏崎小、元気館などがあったが、長くは過ごせなかった。暑さ対策から車中泊もあったが、3年前の中越地震に比べて車中泊は少なかった。自閉の子について、集団にいられないので車に寝泊まりしているのではないかと心配だった。市外のホテルや旅館を斡旋されたいが、またショートも勧められたいが、遠いから離れたくないと...。生活の拠点を移すには、仕事のことだってみんな遠慮したみたい。柏崎は旅館がバリアフリーになっていなくて、トイレもできない状況がある。県からは、入所施設のショートステイを勧められたが、利用者は施設が嫌な人たちなので、利用する人はいなかった。その分トライネットが支えた。そのために我々も頑張ってきた。重度の人が地域で暮らすのは無理だ、やはり施設だ、ということにはならず、乗り切れたのはよかった。宝物になった。底力が発揮できた。利用者にとっても見えるお守りになった。実際に使えるお守りになった。公平性をいかに保つかが課題だった。被災の大きい人、困難さの大きい人を優先した。

避難所の課題

共助、公助の前に、1日目の自助の段階で安心していられるところが必要。元気館。「一次福祉避難所」の指定をしておいて欲しかった。元気な人も元気館に集まってしまっても要援護者が逃げられなかった。最初の1日、2日だけでもよいから、元気な人には体育館に行ってもらい、要援護者が安心して逃げられる場所であって欲しかった。元気館が遠すぎる場合は、地域の小学校でも「この1室は福祉避難所」という指定をして、あそこに行きさえすれば助かるという安心が欲しかった。年寄りからは「足が痛くて体育館の和式トイレに行けなかった」と聞いた。学校や元気館をはじめ避難所となった公共の建物は全てガス冷暖房で、ガスが復旧するまで冷房が効かなかった。扇風機で対応したが、容量オーバーでブレーカーが落ちた。お年寄りの車いすの人はショートステイに行かれたし、重心の人でも、ショートに行くか何とか家に留まって、避難所に避難している人はいなかった。視覚障害の利用者は元気館に逃げた。最初は避難所ではなく、ミーティングする場所だったところ。何人かの障害者が元気館に逃げて、元気館の一角を福祉避難所にすることが後から決まった。1週間身を寄せた。保健所に勧められて特養ショートステイを利用したが、処置

への不満から1日で我慢できずに戻ってきた。スタッフが障害者のことを分からないため。場所ではなく人への不満。山の中のショートで、ガスも水道も復旧が逆に遅れていて、風呂に入れないことも不満だったらしい。避難所の張りつきの自治体職員。すぐに交代してしまい、事情が分からない人では支援がつかない。

仮設住宅

今回は仮設住宅が点在しており、居住地域に近いところにできた。スロープがついて車いす対応と言うが、中が狭くて、トイレや風呂が狭く、段差もあるので、「これで車いすの人が生活できるのか!？」と敬遠された。仮設住宅について問題はこれから出てくると思う。寒い。プライバシー。うるさい。子どもが発作を起こして大きな声を出したら入れないと思う。

災害ボランティアセンター

ボラセンでは個別のニーズを拾えない。市のボラセンにも要請をかけたが、「専門性は求めないで」と言われた。トライネットは片付けができる人が来てもらっても困る。「障害者の支援をやっている人が欲しい」と伝えたところ、「そんなこと言われては困る」。ボラセンの場合朝が難しい。ルールがあって、まず社協に顔を出して手続きをして、...とやっているとお昼になる。3時には帰って、報告書を書いて...と一連の手順がセットになる。そういうのでは現場としては困る。社協には一応頼んだが、他のルートで要請をかけるなどの「二股はかけないで」と言われ、頭に来た。結局は断った。広く、浅く、専門性を求めない一般のところではよいのかも知れないが...。福祉の専門性は求められない。社協は「個別のニーズを上げられても、振り分けられなかった」とも。ボラセンも大変だったろうと思う。中間でとりまとめてくれる組織(コーディネータ組織)があればよかったのかも、と思う。震災のような想定外のことはお役所は最も苦手。個別、即断即決、継続性の必要。

柏崎市は在宅率が低い。肢体障害の養護学校や療護施設がないことも関係。サービスも少ない。相談支援も少ない。

事業内容...障害者が主体となって運営する喫茶店

もとは「フードサンエイ」というマーケット。隣に喫茶店を併設。

17年6月開設。個人経営で、福祉事業所としての認可はない。

利用者20数名。手狭なため10人ずつ交代で活動。月～金。

品田さん、S22年生まれの60歳。

被害...ライフラインが停止したため7/16-8/20は営業休止。ただし、休業中も利用者は来ていた。

隣のコミュニティセンターに食事をもらいに行ったり、自衛隊のお風呂に連れて行ったりした。

社会福祉法人柏崎刈羽ミニコロニーが経営する入所更生施設に食材を納めていた。「職場実習させて欲しい」との依頼あり。

グループホームを建てたいとの希望から、品田さんが私財をなげうってグループホームを建設。社福のミニコロニーが事業運営。品田さんはオーナー。補助金は68万/年。あとから「つけましょう」ということになって。

もともと行政の支援は期待していない。しがらみが多いから。がんじがらめになりたくない。自分たちでできることをやるのは当たり前。

広域的な応援...特になし。ボランティア不要。こうして地元で仲間ができたから。差し入れはあった。共作連等からの問い合わせや励ましはあった。

一人ひとり、マンツーマンの支援が必要。

要援護者名簿について。名簿があるからと言って誰が安否確認してくれるというのか。

ニーズを確認して把握すべき。

ただ、マニュアル的なものはあってもよい。

ヘルパーこない。

2000円/日支払う。

ダウン症、高3、18歳
脊椎狭窄症、57歳

3人家族。

本人...脊椎狭窄症。中途障害。室内手動車いす、握力なし。屋外電動車いす使用。車いすを積み込むオートボックス付きの自動車です。遠距離は移動。

夫...健常者。会社勤め。

娘...ダウン症、はまなす養護学校高等部3年生。小中学校は地域の学校へ、地域のつながりたたれないため。地域の学校に入れるため子どもの障害を説明してまわったら「子どもの障害を触れ回っているのか」と非難され、教育委員会とケンカしたことも。

発災時...家族3人とも自宅。祭日。家の周りに土地の隆起、断裂。子どもがパニック起こした。

避難...逃げた。通りまで出たら揺れが収まった。通常は車庫から出入りするが、発災時は玄関から夫に抱きかかえられて外へ。車いすへ。車庫が壊れたが、足を確保するため何とか車を外へ出した。

1日目は車中泊。家の前の道路で。2日目以降は避難所へ。

生涯学習センター「ラピカ」、高齢者福祉複合施設「きらら」、老人福祉センター
まず、老人福祉センターでは「対応できない」と断られ、高齢者福祉複合施設「きらら」のデイサービスのコーナーに家族3人で身を寄せた。高齢者を中心に20名近くいた。平均94歳、中には100何歳という高齢者もいた。

80代の女性にはよそ者の目で見られて、ドロボウ呼ばわりされることもあった。

子どもはストレスで言葉が出なくなり、大人の自分たちもいたたまれなかった。

きららは泊まるだけにし、朝ご飯を食べ終わった後、昼間は生涯学習センターラピカ（一般避難所）にて過ごした。

子どもは大勢の人が過ごすラピカに行きたがらなかった。そんな時、はまなす養護学校が学校開放を申し出てくれた。涙が出た。小中学校からは2、3名の重心の子と、高等部からは1名利用。教職員が交代で面倒みてくれた。送迎は本人が車で行い、学校で一緒に過ごした。学校の配慮で15:45まで預かってくれた。

きららには8/20まで身を寄せ、8/21～11/24は老人福祉センターに居候した。

洗濯は夫が行った。柏崎の会社の洗濯機を使って洗濯し、自宅に干しに戻り、取り込んで避難所へ。

入浴はきららのデイの入浴施設を利用して助かった。リフト付きだった。福祉センターでの居候中、寝室は相談室を利用。12畳の和室にベッドを2つ入れて、本人と娘が寝て、夫は

床で寝た。

避難所ではトイレは困らなかった。キララでも福祉センターでも。車いすトイレがあったため。

プライバシー。1ホールで過ごすきららにはなかった。避難所に間仕切りが必要と感じた。ラピカには必要。

福祉センターにもプライバシーはなかった。門限が17:00だった。

避難生活の長期化に伴い、部屋から出るのがだんだん億劫になった。相談室から出たくない。制限があるわけではないのだが、心理的に。

夫はもともと丈夫だったが、血圧が190に急上昇して入院。仕事を1週間休んだ。乱高下が続いている。

専門職、技術ボラ

子どもの放課後支援。週2, 3日利用。

ヘルパーは使えない。家族の介護力でみられる。家事援助×。

行政からの支援物資としては、食事のみ。あんなにたくさん物資は届いたのに、どうしたのだろう。私たちには物資は一切届かなかった。

行政からの食事提供は8/20まで受けた。8/21からは「喫茶めぐ」さんの配食サービスを利用。本人は手が使えないため、発災前から「めぐ」さんの配食を利用していた。

情報

避難所にいる間、行政からの情報が届かずに困った。被災者の受けられるサービス、手続き等の案内が半壊した家に届いていた。後になって知った。ラピカには来たが、居候していた福祉センターには届かなかった。

福祉課担当。保健師+職員。

仮設住宅

正面にスロープは設置してもらえるものの狭すぎて使えないと判断。利用しなかった。

国の基準では自分たちには狭すぎる。3DK、2年間のみ。車の持ち込みも不可だったため。アパートや借家により、村独自の予算で広くする提案もあったが、それを使うと復興の100万(半壊)が使えないため辞退した。

自宅の復旧

自宅の復旧工事が長引いた。工事してくれる職人がいなかったため。

上越市の職人さんに直してもらったが、彼らの話だと「応援要請があったらもっと早く直せたのに」とのこと。上越の建設業組合から派遣の打診があったらしいが、柏崎・刈羽からは応援要請をしなかったらしい。村の指定業者しか入れないという縄張り意識。自宅の復旧には4ヶ月半かかった。緊急の時は、縄張りなしに対応してほしい。

5

柏崎市役所
防災・原子力課 須田 幹一課長
福祉課 渡部 智史課長、広田 春二係長

ご提供資料

「平成19年度新潟県中越沖地震の被災状況」A4 たて×1 ページ

「浮かび上がった生活上の不便や課題」A4 たて×1 ページ

ppt「中越沖地震における障害者支援活動状況報告」第2回柏崎刈羽地域障害者自立支援協議会（平成19年11月19日）

仮設住宅...県からは2年と言われている。中越では言われなかったが。

市の復興支援室、生活再建支援プロジェクトで進めている。

高齢者が多く自宅の再建が難しい現状

避難所への職員派遣

市職員だけでは足りず、県職員、他市町村の職員の応援で、2～3人/箇所配置。

コミュニティセンター、コミュニティ組織、町内会で顔を仕切る方が現実的。顔の見える関係の方が大事。運営面では任せの方がよい。発災前は市の職員、施設管理者と協議しながら運営するのが基本であった。地域に任せの方がよい。市職員は1日交替。日替わりで来られても困ると言われる。地域の方は「この人は寝たきりで...」と分かっている対応できる。

顔の見える中でやった方がよい。議員さんがどんと構えているとかえってよくない。

災害時マニュアル

要援護者支援班を定めてあった。想定の時点と本番の違いを痛感した。

実際には難しい。自主防を今年度から本格的に作った。

要援護者台帳

要援護者名簿は市でも作ってあった。地域の方で、手上げ方式にならざるを得ないが、「作ってください」というお願いをはじめた。強制できない。始めたところでは地震が来た。

行政から自主防やボランティアにどこまで情報開示するべきか。

マンパワーが現実的に足りない。

今年から、17,18年度2ヶ年で、要援護者台帳の検討。

市では全庁的にGISシステムがあり、そこにリンクしていくことになっている。民間会社から地図データの提案があったが...

11/19 第2回自立支援協議会を開催

3年前の中越地震の経験が生きた。

相談支援事業者2箇所へ委託。安否確認、ニーズ把握を実施した。圏域に分けて。茨内支援センターともう1箇所は市役所に拠点において。

安否確認は1週間かかったが、2～3日目にはだいたい終わった。県外の知人宅に逃げた

人などが遅れた。委託事業者に台帳、名簿を共有した。

地震当日は市の職員が単身世帯に電話を作戰した。

2日目からは相談事業者にて、人海戦術で訪問を展開した。外部からの応援も頼んで。

市は住宅地図を提供するなど、後方支援をした。

市役所も市社協も経験豊富。2回の地震の他に、水害もあって、支援を受けることも、派遣することも慣れていて。

市職員は「今は何をして、次は何をして」と経験的に把握していた。

ボランティアの役割

家屋の片付け。

応急危険度判定。建築士会など業界も来てくれる。

ボランティアもいろいろ。NGOとして海外に通用する活動や、危険を顧みずというボラもいる。

専門職

県が関係団体に要請をかけた。もしくは、ガス、電気等は協定があって、要請がなくても来てくれる。地域割りも業界で。あとで、請求は来るが。

自衛隊

給食、風呂、給水。災害対策と一緒に構えて判断。夏場でも熱いものがほしい。風呂もありがたがられた。

元気館でデイの入浴サービスを提供。

災害対策本部にいと現場に出られない。課長職は特に災害対策本部にしばられた。

マスコミは同じことを5回も6回も答えさせられて、1日の半分マスコミ対応にとられて、仕事にならなかった。

防災行政無線、同報無線はヘリコプターの音で全く聞こえない。

定員 36 人、登録 80 人、平均 25-26 人、平均障害程度区分 3.0
職員 11 名（パート含む）

福祉避難所

市としては避難所にしたくなかったらしい。

災害医療対策本部をおきたいということで、フロアの半分を提供した。7/16 の昼～8/31。デイのフロアの半分を使って、災害医療対策本部が設置された。7/16 夕方から 8/10 何日デイが再開できないまま、震災の規模が大きく、避難所のニーズが高まり、フロアにどんどん避難してくる人が増えた。

一般の避難所では対応の難しい高齢者・障害者が「使わせて欲しい」と身を寄せてきた。近辺の避難所からピックアップしてきて、リフト車両で連れてきて。福祉避難所が正式に指定されるまでにあっという間に 10 床が埋まった（もともと 13 床あるうち）。発災当初から。福祉避難所としての指定を受けたのは最も遅く 7/20 だが、実質は 7/16 から始まった。施設からの応援 健康管理センター8/3 まで。

入浴サービス...7/23～8/17

デイの入浴施設を使って重度身体障害者入浴サービスを実施。自衛隊がお湯の手配。自衛隊の入浴サービスで入れない人たちを対象に 266 名利用。うち元気館利用者は 85 名。報酬外で対応した。

社福ミニコロニー、身障施設協、介護福祉士会の応援があった。市の広報。

送迎サービス...102 名利用

安否確認には 3 名の職員であたった。7/17 から開始し、すぐに 80%程度判り、3 - 4 日後には完了した。

利用者の被災状況。全壊は 2 名。仮設住宅には 4 名が入った。

下敷きになった人もいた。いったんは一般避難所に逃げたが、てんかん発作があって元気館の福祉避難所に移り、一家 5 人で 3 日間過ごした。だが、元気館でも「何でそんなところ（和室）にいるの」と避難され、居たたまれず一般の避難所へ戻った。福祉避難所は市の管轄。

セミナールーム、個室

自閉症、発達障害の人たちの中には一般避難所には居られず車中泊の人もいた。

福祉避難所では支援スタッフが障害者を受け止め切れていない様子だった。

落ち着かない。コアな人が最後まで残った。知的障害、アルコール依存、発達障害の居る家族。

妊産婦にも広げる必要があり、棲み分けした。

要援護者台帳の活用

比角コミュニティでは独自に要援護者リストを作成して対応していた。コミセン。

ご提供資料

「松風の里 中越沖地震の被害状況」A4 たて×4 ページ
 「松風の里 中越沖地震における被災および復旧の状況報告 H19.11.12」A4 横×6 ページ
 「平成19年度 松風の里の状況」A4 たて×13 ページ
 リーフレット「松風の里」

事業概要

松風の里としては知的障害者入所更生施設（旧法施設）、50名定員。職員26名。
 昼間は生活介護、夜は入所支援。隣の松波の里は旧デイサービス、生活介護を10名程度。
 法人全体では

知的障害者更生施設...松波の里、松風の里、居宅の生活支援
 知的障害者地域生活介護事業...風 sun ホーム、なぎさホーム、風の丘ホーム
 日中活動計系指定障害者福祉サービス...松波の里生活介護、元気館障害者デイサービス（生活介護、自立訓練、地域生活支援センター、指定相談支援事業）

7/16pmには県知的障害者福祉協会の会長と事務局長が駆けつけてくれた。7/17には9名来てもらって支援が始まった。3名ずつ3箇所のグループホームに入ってもらい、一気に片付けてもらった。3年前の中越地震の支援に対するお返し。

第1陣、7/17-24のべ24名。第2陣、7/28-8/1、のべ21名。第3陣、8/11-8-19、のべ18名。

第1陣は片付けとトイレの水くみ。第2, 3陣は利用者の支援を中心に。

被災状況

作業室と体育室が一体となって、居室等とくっついている。

物資の支援も。施設の敷地に断層が三筋貫いて、建物をはこの直撃を受けて、50cm沈んで40cmずれて、周りが1mほど陥没した。幸いなことに居室棟は、エキスパンションが3-4cmずれただけで、中はヒビもなかった。発災当日から居室が使えた。

電気、ガス、水道のライフラインはストップしたが、75食×3回/日×3日分の非常食があった。水が来るようになってからは、食材屋から仕入れてできるだけ通常食に。持ってきてくれるものもあり、1日目からフルーツがあった。

食べるものと寝るところがあったので、利用者もとりあえず過ごすことができた。

7/16は海の日、休日だったためよかった。平日だったら、作業活動で50人が作業場に出てきていたところだったので危なかった重度の人をマンツーマンで移動し終わる頃の時刻の地震だったので、もし平日だったなら人が出ていただろう。ぞっとする。

当日は、海の日、天気よく、3連休。50人定員のところ、12~13人は帰省中だった。残りの38名は2班ほどに分かれて散歩に出ている。1班は海浜公園に、1班は施設の周辺の散策に出ているところでドンと来た。施設内にいた利用者は3名。職員もそばにいたので大事に

は至らなかった。

厨房ではお湯を沸かしていた。職員が1人だけ、少し離れた位置にいた。もう少し遅い時間で昼近かったら、多くの職員がちょうど回転釜を扱っていて危なかっただろう。

生活環境は比較的保たれた。作業棟がやられたことにより、通常の日課、お盆が終わる頃からは利用者はやることがなくなって困った。プレハブを1棟建てた。設置費込み、エアコン付き1年半で75万と安かったが、後から頼んだ電気工事が18万と高かった。

ライフライン

電気は一番早かった。7/18には復旧した。ガスは地下埋設で破断したのを地上配管で応急措置。施設の場合比較的早く7/27につながった。水道は7/30だった。

水は時間がかかりそうということで、受水槽を給水車の支援で満水にして、受水槽から配水できるようにした。施設内給水はできるようになった。屋上の受水槽でなく、地上の受水槽でよかった。受水槽は16トンの容量。下のバルブで水が抜けるので使える。ポリタンクだと給水車の水を大量にもらえないが、受水槽が水瓶代わりになった。

ガスについては施設長の知人が茨城からボランティアで駆けつけてくれ、ガスボンベとレンジを2セットもってきてくれて助かった。

一番困ったのは洗い物で、使い捨ての食器に頼らざるを得なかったが、知的障害者福祉協会や老施協からプラ食器の備蓄をもらった。受水槽から水は引けても十分ではなく、シャワーを使う程度、粹槽には水を張らずに使っていた。

風呂は被災していない知的障害福祉協会の会員施設で、マイクロバスをもって、運転手も連れてきてくれて、自施設のマイクロバスの運転もしてもらいながら、2台体制で移送。風呂に入れてくれた。

他に、泊まり込みのボランティアが水はプールの水を使って、薪でお湯を沸かしてくれて、仮テントを張って、利用者の行水支援をしてくれた。

最も困ったのがトイレ。下水の心配もあったが破断はなかった。仮設トイレがくるのに4～5日かかった。その間は通常のトイレを、プールから水をもらってきて流した。流し方も苦労した。少しの水でも勢いよくぶっかけると流れるとが分かってきた(水浸しになるが)。支援に来てくれた人が、水くみ、水流しの支援をしてくれた。水のありがたさが分かった。

洗濯は、被災していない地域のコインランドリーを借りに行ったが、みんな考えることは同じで、4時間くらい待たされた。

3日目くらいに、リネンに入っている業者が洗濯を引き受けてくれて、2週間くらい委託した。25万ほどかかった。ふだん洗濯機は1日2～3万くらい稼いでいるコスト計算になることが分かった。

安否確認

電話は停電により不通になった。全部で30数系統(子機)あるが全て使えなくなった。利用者の親から安否確認の電話をかけても、親の電話では呼び出し音はするが、こちらの電話は鳴らない状態。「呼んでいるのに出ない!」「何があったのか?」と心配をかけた。固定電話の方は、電話業者に頼んで、7/17pm非常用電話を1本だけ開けてもらった。

携帯は比較的通じた。7/16の10:13から夕方までは、携帯の着信歴、メールの着信歴はたくさん残っている。親御さん、知人とのやりとり。

携帯で保護者会の役員に連絡をとって、役員さんから親御さんの携帯に無事を知らせてもらった。携帯電話を持たない利用者の親もいるので、結果的には4日間くらいかかった。

個々の職員も、携帯や携帯メールで親御さんと連絡をとった。1人の職員は安否確認専門であたせられた。連絡のとれない家族を訪ねた。

帰省中の利用者が家族と一緒に避難所に逃げたはいいが、パニックになってしまう母親も。どこの避難所か把握できないくらい。たまたま毎日新聞の取材を受けて、「母親の近くで子どもが途方に暮れています。この子のいた施設はどうなったのでしょうか!？」などと書かれてしまった。

職員の参集体制

職員は震度5以上の場合駆けつけることになっているが、発災時は休みの日で、職員は市外の人もいて、長岡市や上越市在住の職員は地理的にその日は来られなかった。施設長自身は駆けつける途中、道路が3mほど断裂していて、車を置いて歩いてきた。

ボランティア

施設長の知人、栃木から。神奈川の歯科医師、飛び込みでタクシーで駆けつけてくれた。

トイレ

仮設トイレ7基。1基は敷地のトイレに設置し、地域の人に使ってもらった。水からペーパーの管理までして、喜んでくれた。

柏崎市に仮設トイレは5000基来たが、設置の業者が足りず設置が大変だった。自力で軽トラでとりに行く人もいたが、クレーンがないともてななかった。使われなくなってからは、今度は撤収が大変だった。連絡しても取りに来ず、お盆過ぎまであった。

くみ取りは1回もしなくてよかった。仮設トイレのタンクは相当量ある。

地域住民および施設外障害者の受け入れ

地域の人も施設に受け入れた。近くの県営住宅の人で、タンスが背中に当たってしまった人。医療チームが7/16から元気館に立ち上がり、福祉施設を巡回で来てくれた際は、利用者は元気だったので、その県営住宅の人の看護。

短期入所。被災関係で7名受け入れた。他の法人のグループホーム利用者3名。短期入所や日中一時支援の児童の人3名。自宅で被災した知的障害の女性1名受け入れた。その女性は、兄弟とヘルパーの支援で自立生活していたが、家が全壊したことで入った。7/16から短期入所で誘ったが本人が納得せず。ボランティアの協力により7/20の夜22:30頃きた。

5%枠で50+3名まで定員超OK。男性33名+女性19名。もともと男30名、女性20名であったが、グループホームができてからは、女性がどんどん出ていき、女性が入ってこない。男性で欠員を埋めていた。

ご提供資料

「中越沖地震における障害者相談支援センターの活動について」A4 たて2段組×3ページ
 「中越沖地震における障害者相談支援センターの活動全体像」A4 横×1ページ
 「2007/7/16 発生！中越沖地震における障害師や相談支援センター拠点の活動を振り返り、全国へ発信するための基礎資料」A3 横×1ページ
 「中越沖地震におけるこころのケアチーム活動と障害者相談支援活動の報告」A4 たて原稿用紙×6ページ
 ppt 「中越沖地震におけるこころのケアチーム活動」A4×3ページ
 ppt 「災害とこころのケア」A4×8ページ

中越沖地震による県委託事業

こころのケアチーム拠点(7/17～)

障害者相談支援センター拠点(7/18～)

この2つが効率的に連携することで被災者の支援が効果的かつ迅速に行えると考えた。

一次スクリーニング

二次スクリーニング

個別支援...2ヶ月、301名、1015件(延べ3000名以上の障害者との関わり)

こころのケア

三次スクリーニング...60名、継続支援

要援護者リスト 1748名、行政から提供された要援護者台帳よりも多い

知的A判定、精神1,2級、身障1種の台帳+

安否確認... 電話、避難所へ訪問

11人/日+ の体制、最初の1週間は30名体制

2～3日で大体の確認を終えた。住所変わった人、特に県外に移った人の確認が遅れた。

知的と身体相談支援事業所の協力を得て進めた。

個別支援は同時並行で進めた。身体障害の人は比較的自分からSOSを出せた。知的のみの世帯、精神の世帯の支援がポイントだった。避難所の集団生活への抵抗。一般の避難所から、福祉避難所や病院への入院へ誘導。

ホワイトボードで情報を張り出して管理した

9:00-18:00。まとめに3時間。支援を組立、コーディネートした。

一般の避難所、1週間は我慢できる。

「眠れない」との訴え。保健所からの要請でサポートした。

本来業務

利用者6人が被災。いこいの場の活動。ボランティアで対応せざるを得なかったが、行事等は休止。イライラしてくるのが判った。8月中旬から平常に戻した。
こころのケアは8月下旬より保健所に拠点を移し、8月末で終了。9月からはホットラインのみ継続した。

中越沖地震における障害者相談支援センターの活動について

茨内地域生活支援センター

施設長 岡部正文

< 震災発生日 >

7月16日(海の日)午前10時。一家4人で買い物に出かけた直後に中越沖地震に遭遇。すぐに自宅に引き返しテレビで情報収集をすると柏崎が震度6強という情報であったため、迷わず子供達を妻に任せ急遽職場に向かいました。妻も3年前の中越地震の経験から私が職場に向かうことは予測していた様子で何も言わず送り出してくれます。

長岡の自宅から柏崎に近づくとガス管が破損したと思われる臭いが立ち込め、倒壊した家屋を横目にしながら2時間以上かかり職場に到着しました。車中では大変なことになったという想いと同時に、3年前の経験を踏まえまず何をすべきかどう行動することが効率且つ適切か頭を悩ましていました。

職場には近くに住む精神保健福祉士と看護師が先に到着していました。まず、自らSOSを出すことが苦手な単身者や高齢者と障害者の2人世帯を中心に訪問し避難所へ誘導しました。避難所への誘導は同時に市内の被害状況や避難所状況を把握することに役立ち、2日以降の活動を考える材料になりました。

< 2事業の拠点 >

近年、新潟県では三条の水害、中越大震災を経験し中越沖地震は3度目の被災となりました。度重なる被災経験から現地の対応も外部の応援も発生日から行われました。障害福祉関係では翌日に障害者相談・こころのケアの両コーディネーター(県職員)が現地入りしたので2事業を円滑に進めるためにどうするか夜遅くまで協議を続けました。協議の結果、当面は拠点の機能を相談の集約振り分け機能に特化し、拠点に寄せられた相談を地域の専門機関(身体・知的チーム、精神チーム、高齢者チーム、こころのケアチーム、ボランティアチーム)に依頼していくことにしました。また、障害者

の安否確認と並行して拠点が設置されたことを自宅訪問や避難所巡回などで周知することとしました。

関係機関に説明するための支援体制図を作り、3日目に主要な関係機関に足を運び協力依頼を行いました。柏崎地域は15年以上前から関係機関の連携強化のための活動を継続し、普段から支援者同士が顔を合わせる機会が多かったこと、また地域自立支援協議会の立ち上げに1年以上の時間をかけ支援者同士に仲間意識が生まれていたお陰で皆、快く協力を了承してくれました。

この時期は災害発生直後でもありヘリが上空を飛び交い、防災無線が情報を絶えず流し続ける戦場のような雰囲気の中での活動でした。3年前に経験していることはいえ冷静さを保つことは容易ではありません。振り返ってみると、2人のコーディネーターと共に支援体制を協議できたことや随時、病院長や多くの先輩方に相談し的確なスーパーバイズを受けられたこと、そして「それでいい」と背中を押してただけただけで自分を保てたと感じています。

今回のように被災地における障害者相談支援センターとこころのケアチームの2つの活動拠点を一箇所にしたのは全国初の試みであったと思います。その背景には障害者自立支援法により3障害が一本化されたこと、当センターが新潟県及び柏崎市・刈羽村からそれぞれ相談支援事業を受託していたこと、そして旧精神障害者地域生活支援センターとして保健所とのつながりが深かったことが理由として挙げられます。

< 障害者相談支援センターの活動 >

障害者相談支援センターの活動としては、3障害に対応したきめ細かな相談支援を実施するべく、発生から1週間で安否確認やニーズ把握を目的とした要援護者等の一次スクリーニ

ングを完了。その後、個別支援を必要とする対象者のピックアップを目的とした二次スクリーニングを実施しました。当然のことながらスクリーニングに並行して支援を必要とする障害者に対しては、訪問を中心とした直接的な個別支援を行いました。7月末には二次スクリーニングも完了し、8月からは要支援者に対しての個別支援を集中的に行いました。

震災初期の7月は「眠れない」「不安である」「落ち着かない」等の相談が多く寄せられ、こちらのケアチームにケースを引き継ぐことが多く、同一場所のメリットを感じました。同じ場所で活動することで互いの大変さを分かち合えるので支援者同士が自然と助け合い、補い合う関係性できていました。これは被災地に派遣された支援者が中越大震災で活躍したベテランの専門家であり、被災地の支援者に気を使わせないように、黒子のような気配りがあったことも大きく影響していたと思います。

7月下旬になると、不自由な避難所生活から精神的不調を訴える障害者やライフライン復旧の遅れに伴い入浴に関するニーズが多くなり、スクリーニングで明らかとなった障害者の現状を市役所へ伝え対応策を依頼しました。これにより、障害者の入浴サービスが開始されました。またこの時期から「落ち着かない人がいるので対応してほしい」と避難所に駐在している保健師等からの相談も多くなり現場に駆けつけ対応に追われました。このように、発生2週間後は相談の幅も広がり拠点には電話対応に必要な最低限のスタッフを残し、受け付けた相談に対しては現地に足を運び本人や避難所の保健師等と直接会って情報収集し、直接支援することを心がけました。

8月は個別支援を中心に活動を進めました。特に単身の精神障害者については一人にかかる支援回数が多く、震災直後の不安軽減支援 体調不良支援 部屋の片付け支援 行政手続支援 仮設への引越し支援など一連の被災生活支援を必要とする方。医療中断により症状が悪化し自ら身の安全を確保できない障害者に

対しての、保健所・警察の協力を得た受診援助。30年引きこもり生活をしていた方の入院支援等がありました。身体障害では入浴、水汲み、片付け、食事確保などを地域住民やボランティアへ協力要請する調整や福祉避難所の斡旋等がありました。知的障害では片付け時の一次預かりや介護者の怪我によるショートステイ利用、軽度知的障害者のみの世帯の包括的な生活支援などがありました。

しかし、中には発達障害の子を抱えて「避難所に食事をもらいに行っても子どもが落ち着かなくて諦めた」「(男の子を抱える母親だと)仮設風呂に一緒に入れない」「しがみついて離れなかった」などの声もあり、障害者相談支援センターに相談する前に我慢しているケースも多かったようです。

今回の震災は中越大震災と比べると余震の回数が少なかった印象があります。そのためか、震災直後はこちらのケアに関する相談がかなり寄せられましたが、1ヶ月後からは相談は少なくなり8月末でこちらのケアチームの活動は終了し、こちらのケアホットラインのみ稼働しています。また、障害者の相談もライフラインが復旧した後は減り始め、9月上旬には震災に関する相談はぐっと少なくなっています。このような活動を通じて障害者相談支援センターとして個別支援した障害者は、震災2ヶ月間で実数301名、延べ支援件数1015件にのびりました。

活動開始から2ヶ月目を迎える9月上旬にはコーディネーターの提案もあり、支援漏れがないか確認するため最終スクリーニングを実施しました。最終スクリーニングの結果、屋根瓦の処分に困り途方にくれていた知的障害者等、時間が経過するにつれて支援が必要となる障害者が発見されました。最終的には、震災により今後も継続して支援が必要と判断された障害者は60名に上りました。

< 平常時の支援が途切れる危険性 >

震災対応に特化した形で支援が進められる中、普段、当センターを憩いの場として利用し

ている障害者も地域には沢山いらっしゃいます。震災直後から、憩いのスペースは平常通り開放していましたがイベントは全て中止となり、県内の支援者が多数出入りする状況においては普段と違いゆっくりと話ができる雰囲気ではなくなってしまいました。その結果、利用者のストレスは増し、体調を崩したり、イライラしたり、落ち着かない方が多くなってきました。2名の専属スタッフと実習生に協力してもらい対応してきました。

できるだけ早く平常時の雰囲気に戻さなければならないと感じ、8月中旬からは当センターのイベント(ソーメン流しやカラオケ等)を再開するとともに、震災体験の吐き出しケアなどを企画実施し、震災情報掲示板(畳3枚分の掲示板)も全て片付けました。憩いのスペースが平常に戻ると「やっと元のセンターになってほっとしたよ」と微笑みながら話す利用者の顔が印象的でした。今では一日20名程度の利用に戻っています。

<まとめにかえて>

今回、2つの被災地支援活動(障害者相談とこころのケア)の拠点を同一場所で受けたこと、震災直後において拠点の機能を相談の整理・振り分けに特化したことは、効率的に支援を展開できるという点で有効であったと思います。また、有効に機能した背景には震災対応できる有能なコーディネーターがそれぞれいたこと、被災地への協力者が直近に中越大震災を経験し支援に慣れていたことが挙げられると思います。

しかし、拠点が機能を果たしできるだけ障害者のニーズに応えていくためには、拠点以外の直接支援に携わる関係事業者等と日頃からお互いに助け合う仲間同士という意識を作っておくことが欠かせません。つまり、地域のネットワークが普段から強固なものであることが前提として必要です。

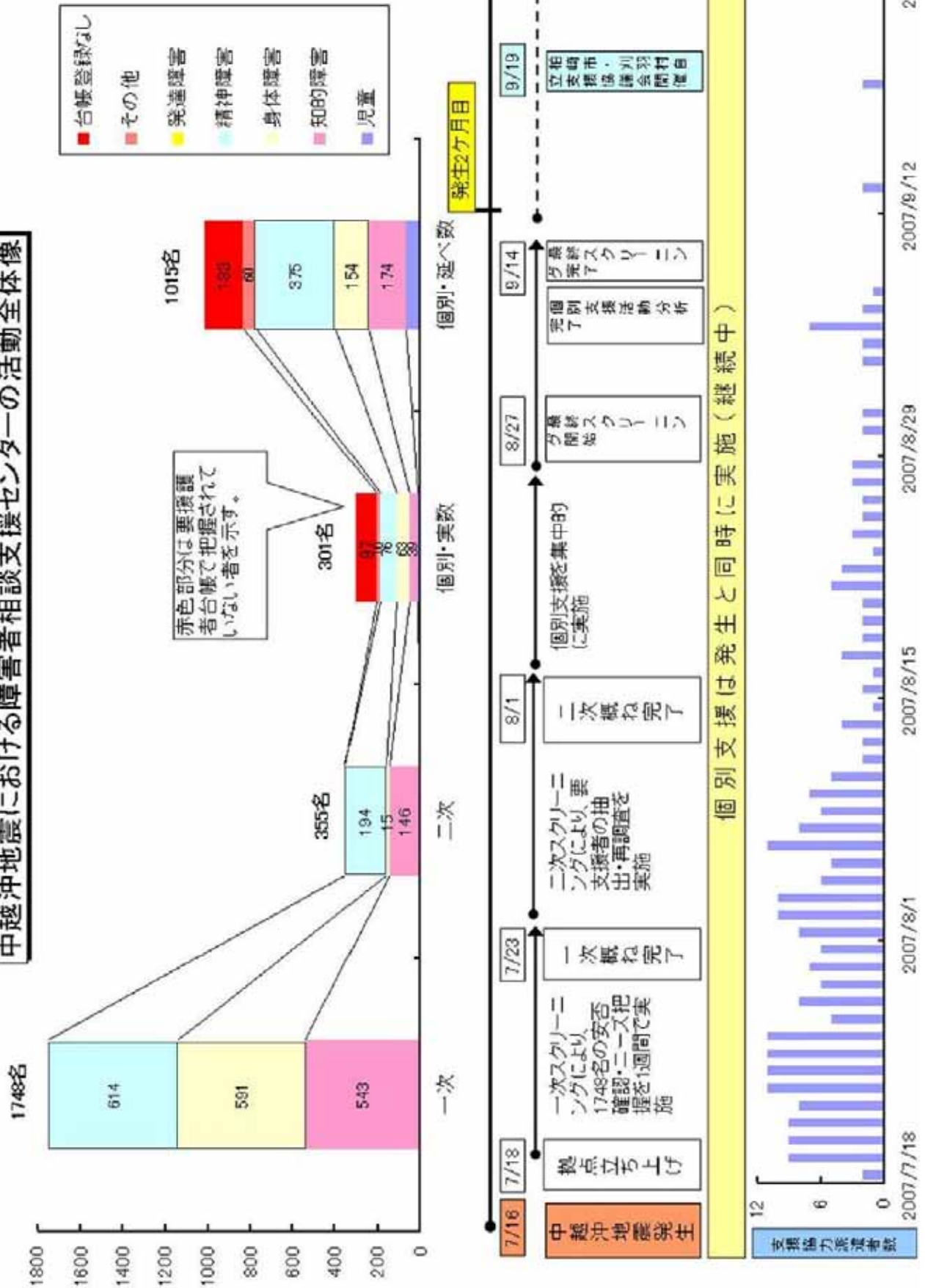
そして、相談支援事業者は平常時から障害者と関係を作っておき障害者やその家族が非常時に安心してSOSを出せる関係性を構築しておかなければならないこと、そのために相談支援に携わる人員も含めて地域における相談支援体制を充実させておくことがどうしても必要です。

震災2ヶ月後に柏崎地域自立支援協議会では『関係者同士が目標に向かい仲間意識を持って、顔の見える関係性を作ってきたけれども、更に普段から地域住民と顔の見える関係性を作っていくことが必要だ』と、今後の課題として、コミュニティーワークの視点がキーワードになることを確認しました。

以上のように中越沖地震における障害者相談支援センターの活動を中心に報告させていただきました。この原稿は発生3ヶ月を過ぎてから書いています。今回字数の関係で触れられませんでした。支援者の支援も欠くことができません。支援者の吐き出しケアなどもやっていますがまだまだ時間がかかりそうです。支援の中心を担ってきた人たちは発生2ヶ月半ばを過ぎた10月前後から、風邪を長引かせたり、気力が低下したり、集中力が欠けたりと震災直後の正常反応を起こしています。私もそのひとりで先日まで原稿に取り掛かれませんでした。もしかしたらまとまりが悪く要領を得ない文章になっているかもしれませんがご勘弁ください。「がんばろう柏崎!」などののぼりをあちこちで見かけますが、やりすぎると危険です。今の時期は「ぼちぼちいこう柏崎」位の方が燃え尽きないでいいと思っています。

この度の震災に全国各地から支援に駆けつけてくださった全ての方に、この場を借りて御礼申し上げます。本当にありがとうございます。

中越沖地震における障害者相談支援センターの活動全体像



社協内の避難所は市が設置。市が対応した。他に、災害ボランティアセンター、赤十字の本部が設置された。派遣ボランティアの休憩場所も。

3ヶ月で2万人のボランティアが参加。活動内容のとりまとめはまだ、これから。7割が県外から。9/18で災害ボランティアセンターは閉所して、9/19からは市のボランティアセンターとして継続。災害支援も少しずつ続いている。

ボランティア派遣におけるマッチング

「ボランティア要請票」にて依頼内容を記入。張り出してマッチングした。筆談、手話の要望があったがボランティアに手話のできる人がいて特技を活用してもらった。ボランティアの何ができるか、支援内容をガムテープに書いて胸にはりつけた。よかったと評判。

電話で依頼を受け付けたが、聾啞の人からはファックスで依頼が届き、訪問した。ボランティアを装い個人宅に入り込もうとするマスコミもいて、排除が大変だった。

看護師や医師の専門職のボランティアの場合、スキルを生かすべく保健所と連携して派遣した。ボランティアの資格やスキルを見極めるのが大変だった。

コーディネータからすると「分かってくれよ」。ボランティアの志、熱意、パワーと住民のニーズとの調整が大変だった。

ボランティアには気持ちを置いていってもらえるものをあつらえるよう心がけた。

トイレは早くから支援物資として申し出があり届いた。

使い方が判らなかつた。回収が必要だったが、設置箇所が把握されず、放置された。処分の仕方も困った。

ゴミの処分、粗大ゴミの受け入れは当初は業者のみであったが、収束後は個人のゴミも受け入れるようになった。自宅でのゴミの分別、町内ごとの集積所へ搬出。

発災直後はブロック塀の片付けが多かった。

クリーンセンターは震災で稼働停止。もえるゴミは県外へ。

仮設住宅への引越手伝い

軽トラック2台を社協がリースしている。災害直後は災害ボランティアセンターで2トン車7～8台、移送用の8人乗りを3～4台を用意した。ボランティアがマイクロで駆けつけた際は、マイクロバスを借り上げて人送にあたった。

敷地内に1000人が滞留すると大変なので、効率よい派遣に努めた。

福祉避難所

当初は1階の物資庫を使ったが、2階の畳張りの部屋、2間つづき（現、生活相談員の部屋）に移った。高齢者、障害者が入った。

1階の部屋はもともと介護保険の事業所の部屋。100人用の部屋。7月に別施設に引っ越したばかりで空きであった。

避難所機能は8/2まで。7/18がピークで159名。8/1には1名となり、閉鎖となった。

7月末にはコンテナハウスで32畳+16畳を増設。ゲートボール場に設置。ボランティアセンター本部として機能した。

福祉避難所の要支援者

開設直後、視覚障害者が利用。ケアマネが一般避難所から福祉避難所へ誘導して、数日泊まった。

ベッドは福祉機器の業者に展示品を持ってきてもらった。

居宅事業所として

安否確認は介護保険、支援費の利用者について、7/16中に全員無事を確認した。

デイサービスは3施設あるが、施設が被災して、ガス、水道が休止。7/16～18の3日間閉所した。

ご提供資料

チラシ「災害後のこころの健康相談会」
 チラシ「ノロウイルス感染予防 重要ポイント」



仮設住宅集会場 外観



仮設住宅集会場 ホール



仮設住宅集会場 多目的トイレ



仮設住宅 外観



単身用仮設住宅室内 1DK



仮設住宅 キッチン



仮設住宅 防災無線受信機

まとめ（キーワード） (1)災害支援の進化...ハード ソフト、物 人

大量・一斉・画一 少数・適時・個別

災害時要援護者への集中的、継続的支援の体制を以下に作るか

(2)個別支援への対応、専門職の活躍、コーディネート機能、拠点づくり

(3)行政からノウハウとマンパワーの集積した民間への委託、支援現場における裁量権

(4)安否確認...個別支援、こころのケアとセットで

(5)業種内連携、業種間連携、行政との事前協定の課題

(6)新潟のように学習されていない地域では！？

要援護者台帳を整備するだけでは支援が成り立たない

災害ボランティアコーディネーターや自主防災組織として

福祉事業所として、障害当事者として何ができるのか

参考

高齢者、障害者等の要援護者への緊急的対応（厚労省通知）

避難生活が必要となった高齢者、障害者等の要援護者については、旅館、ホテル等の避難所としての活用や、緊急的措置として社会福祉施設への受入を行って差し支えない旨を新潟県及び新潟市に通知(7/16)

避難生活が必要となっている在宅の高齢者、障害者等の要援護者に対して、福祉施設における定員を超えての受入、空きスペースなどを福祉避難所として提供することなど、緊急的な措置への対応を全国社会福祉協議会を通じ新潟県内の社会福祉法人に依頼。(7/17)

避難生活が必要となっている高齢者、障害者等の要援護者について、新潟県等から旅館、ホテルに対して避難所等として受入要請があった場合の協力について、全国旅館生活衛生同業組合連合会に依頼(7/17)

被災した要介護の高齢者等に対する避難所等における対応、介護保険施設等における受入、利用者負担の減免、保険料の徴収猶予・減免及び要介護認定事務の取扱等の緊急的な措置への対応について新潟県等に通知(7/16)

被災した要援護障害者等に対する避難所等における対応、障害者支援施設等における受け入れ、利用者負担の減免等の緊急的な措置への対応について新潟県、長野県、新潟市及び長野市へ通知(7/17)

避難生活に伴う廃用症候群の発症の予防について新潟県等に通知(7/16)

罹災地域における社会福祉施設等の入所者等の生活を確保するための職員の確保が困難な施設に対して、他都道府県からの派遣等が必要となった場合には、国へ申し出るよう通知(7/17)

新潟県等に対し、避難所等にいる要援護高齢者等への介護サービスの提供について、介護サービスが必要な者及びその需要を把握し、対応が困難な場合には、介護サービスの広域的な利用調整を行えるよう体制を整えるよう通知(7/17)

関係団体宛に、被災地における視聴覚障害者等に対する情報・コミュニケーション支援に関して、現地の関係団体等と連携の上、人員の派遣体制の確保等について協力依頼(7/17)

避難所における被災者への対応（厚労省通知）

避難所の生活環境の整備及び応急仮設住宅の設置等による避難所の早期解消について次の事項を新潟県に通知(7/16)

- ・ 避難所について、被災者に対するプライバシーの確保、暑さ対策、仮設トイレ等、生活環境の改善対策を講じるとともに、高齢者、障害者等の災害時要援護者のニーズを把握し、必要な対応を行うこと
- ・ 食品の給与について、メニューの多様化、適温食の提供、栄養バランスの確保、高齢者や病弱者に対する配慮等を必要に応じて行うこと。
- ・ 応急仮設住宅について、速やかに必要数を把握し、地域社会づくりに配慮して、応急仮設住宅を建設すること。

参考

(連絡先)

柏崎市役所 保健部福祉課	Tel 0257-21-2234
特別養護老人ホーム榎山けやき苑	Tel 0258-29-2500 fax0258-29-3131 〒940-2002 長岡市榎山町1593番地1
たまりば喫茶めぐ	Tel 0257-24-6141 fax 0257-24-6665 柏崎市松波2-2-39(フードサンエイ)
特定非営利活動法人トライネット	〒945-0046 柏崎市四谷1-14-37 TEL.&FAX. 0257-21-5090

次回予告

日時 平成20年3月12日(水) 午後

場所 名古屋市総合福祉会館、大会議室

講師 茨内地域生活支援センター施設長 岡部正文さん

内容 中越沖地震における障害者支援 - 安否確認と個別支援、こころのケア